

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS



令和3年度

郡山市おもいやり作文コンクール

優秀作品集



郡 山 市

もくじ

■もくじ

■作品

【最優秀賞】	私が考える町	郡山市立高瀬小学校	六年	緑川陽向	4
	支え合うことのできること	郡山市立三穂田中学校	二年	伊藤彩笑	6

【優秀賞】	住みやすい町	郡山市立芳賀小学校	五年	横田乃映	10
	より良い未来へ	郡山市立芳賀小学校	五年	小名柚月	12
	自閉症の人たちの思い	郡山市立芳賀小学校	五年	有我香甫	13
	「ありがとう」の笑顔	郡山市立安積第二小学校	六年	山崎紗弥	15
	努力に脱帽	郡山市立大成小学校	六年	國分昭俊	17
	どんな人でも、尊い命	郡山市立郡山第一中学校	一年	橋本美潤	19
	今の町は暮らしやすい？	郡山市立郡山第一中学校	一年	佐藤力工	21
	私の伝えたいこと	郡山市立郡山第五中学校	三年	吉田紗彩	23
	やさしさあふれるまちにするために	郡山市立郡山第七中学校	一年	菅原嵩史	25
	障がい者と暮らす	郡山市立郡山第七中学校	三年	相楽雛那	27

【佳作】

ぼくの祖父	郡山市立小山田小学校	四年	長嶺利央	31
実用性のあるバリアフリーへ	郡山市立桜小学校	六年	松浦悠花	33
心と心をつなごう				
く人にやさしいまちづくりに向けて	郡山市立富田東小学校	六年	大迫楓	35
「平等」な人生	郡山市立橘小学校	四年	佐久間奏甫	37
心の障がいのある弟でも	郡山市立薫小学校	五年	小西唯月	39
知らせるマーク	郡山市立郡山第三中学校	三年	小野瀬純愛	41
「普通」はない	郡山市立郡山第四中学校	三年	伊藤杏実	43
「意識」	郡山市立郡山第五中学校	三年	小野泰耀	44
私の祖母	郡山市立郡山第七中学校	一年	今泉柚乃	46
「身のまわりのバリアフリー」	郡山市立富田中学校	二年	國分綾	47

■講評

.....

50

■実施要項

.....

51

■作文応募状況

.....

53

【最優秀賞】

私が考える町

郡山市立高瀬小学校 六年 緑川 陽向

みなさんは、いつも見ている風景と少し違った感覚で日常を過ごしたことはありませんか。私は、もし自分が障害者になつたらと考えながら過ごしてみました。そして、工夫されている所とない所など色々ありました。また、家でタオルを目にかぶせて視覚障害者になってみたりもしました。そして、目の前が真暗で、もし前に人がいたらと考えるととてもこわくなって、歩きたくないと思ってしまう。また、障害者は毎日こう過ごしているのだと思うと、すごいなと思いました。その時、障害者にとって過ごしやすい町はいい何だろうと思いました。

まず、障害者が日常で困っていることをタブレットで調べてみました。すると、色々ななやみがありました。目が見えない人は、点字ブロックの上に物が置いてあり通るのが大変ということや、盲導犬といっしょに店に入れないことがあります。そして、耳が聞こえない人は電車でアナウンスがなくてもなにも聞こえないから、じょうきょうを伝えても何が起きているのかわからないといったのがありました。ま

た、言葉などでできずつくこともあるそうです。これらのことを考えてみると、障害者にしかわからないなやみがあるということがわかりました。

そこで私なりに障害者にとって過ごしやすい町について主に三つ考えてみました。一つ目は、目が見えない人のために点字ブロックには物を置かないようにしたり、盲導犬でも入れる店を増やすことです。そうすることで、障害者は毎日とても楽しく過ごせると思います。二つ目は、耳が聞こえない人のために、私は耳が聞こえませんという合図の物を作って身につけてもらうということをしたり、じょうきょうを伝えるのを声だけでなくモニターに写すことです。そうすることで、回りの人がその人を手助けできると思うし、モニターに写すことでちゃんとじょうきょうを知ることができると私は思います。三つ目は、みんながやさしい心をもちコミュニケーションを大切にすることです。そうすることで、障害者はとても助かりますし、コミュニケーションを大切にすると仲良くもなれると思います。

最後に、自分をありのままにして生きている障害者は、見方を変えると自由でかっこいいなと思いました。そして、その人たちに少しでも役に立つように今回は書いてまとめてみました。私は色々と調べて、障害者にとってこういう町だといいいのかな。など、色々な事を考えました。そして、何か建物を建てる時は、障害者のことも考えて建てるのもいいと思います。また、人間関係も町の一つだと思います。温かくない言葉を言われたら、私だって心が折れます。なので、みんながやさしくて温かい言葉をかけ、コミュニケーションを大切にすることによって元気が出るのではないのでしょうか。そして、私はまだまだ知らない事が色々あると思います。でも、力になれることもいっぱいあると思っています。なのでこれから先、障害者がこまっていたら力になれるようそして、過ごしやすいようになるようがんばって、みんなが楽しく過ごせる町にしたいです。

支え合いつつどでできるんじょ

障がい者の方を町で見かけると私は胸が苦しくなります。そしてかわいそうだなと感じます。なぜ世界中の人々が何の不自由もなく生きることができないのだろうとも考えてしまいます。しかし、今年の夏、日本で開催されるパラリンピック選手のインタビューをテレビでみて、この「かわいそう」という思いが偏見なのだと気がつきました。インタビューを受けているパラ選手は、始めこそ泣きながら苦しかった過去を話しているけれど、最後には今まで泣いていたのが嘘のように笑顔になっていました。そして人生をかけてパラリンピックに臨んでいます。それは障がいのないオリンピック選手と何ひとつ変わらない姿なのだと感じました。

私は今まで障がい者というと、足や腕がない方や車椅子に乗っている方、目や耳が不自由な方と考えていました。しかしきちんと調べてみると障がい者とは「身体障害、知的障害、精神障害、その他の心身の機能の障がいがある者であって、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるもの」とありました。外見

だけでは障がい者とわからない人もたくさんいるのです。それならどのように行動すれば障がい者への偏見のないやさしい町になるのだろうと考えてみました。

私は人々の「支え合い」が一番必要だと思っています。障害の有無に関わらず、人と人が支え合うことで皆が誰かに必要とされ、それが生きがいになったり日々の笑顔につながったりするのだと思います。例えば、誰か困っている人がいた時に声をかけること。書いている今はとても簡単なことだと思うけど、実際私に声をかける勇気はありませんでした。家族や知っている人になら「どうしたの」と言っても、知らない人に声をかける勇気がなく、見て見ぬふりをしてしまったことが今までありました。後から、「あの人大丈夫だったかなあ」と思い後悔しました。きっとこのような思いをした事があるのは私だけではないと思います。そのような時に、言葉や手が自然と出せる人になれば、それが、支えにつながるのだと思います。障がいの有無に関わらず、相手に「どうしましたか」「お手伝いしますか」と声をかけることができる人に

郡山市立三穂田中学校 二年 伊藤 彩笑

なりたいと思っています。

私の祖父母はとても元気で、病院で働いたり米や野菜を作ったりしています。今は元氣な祖父母もこれからもっと歳をとった時に、歩けなくなったりご飯が一人では食べられなくなったりする時がくるのだと思います。そんな時、私たち家族が祖父母の支えにならなければと思っています。私ができることは少ないかもしれませんが、私にしかできないこともきつとあると思います。体の大きい父と兄は体を支えたり、話をするのが好きな弟は楽しい話をして笑わせたり、看護師の母は経験を活かしてアドバイスしてくれるでしょう。皆が自分の強みを活かして助け合うことができます。そして、これは私の家族だけの話ではなく、地域全体で考えても同じことが言えるのだと感じます。誰にでも得意なこと、苦手なことがあって補い合っていくことが大切なのだと思います。誰にでも思いやりの心を持って助け合うこと、それが地域でできたなら、その時に初めて障害の有無に関わらず優しい町作りになるのだと思います。

私は母や祖母の影響もあり、小さな頃から看護師になることが夢でした。どんな状況でも患者さんのことを考え、いつも一番そばで寄りそう看護師にあこがれています。今の私が障がい者のためにできることは少ないかもしれませんが、いつか自信を持って積極的に行動できる看護師になりたいで

す。そして日本中が思いやりの気持ちがあふれる国になれば良いなと思います。



【優秀賞】

住みやすい町

私は、障がいについて、今まで深く考えたことがありませんでした。今年は東京オリンピック、パラリンピックがあるので、障がいについて自分なりに勉強してみようと思いました。

まず、障がいといっても、色々な障がいがあることが分かりました。目が不自由な人、身体が不自由な人、見た目では分かりにくい障がい、生まれつき障がいのある人、事故や病気などで障がいを持つ人など、たくさんの障がいがあることが分かりました。私は、見た目では分かりにくい障がいのある人をもしかしたら、きづつけていたんじゃないかと不安になりました。だれから見ても障がいのある人にだけ親切にしてもダメだという事が分かりました。困っている人や不安そうにしている人には、必ず助けてあげるという気持ちが必要だと思いました。

次に町の中をよく見てみました。町の中には、たくさんのかん板やマークなどがありました。よく行くスーパーの駐車場には入り口近くに障がい者の人用のスペースがあります。

郡山市立芳賀小学校 五年 横田 乃映

でも、たまにふつうの人が止めています。本当に必要な人が使えないのは残念だなと思います。お店の入り口には、ほじよ犬マークがついていました。他にも色々な場所を見てみました。気になったのは点字ブロックです。点字ブロックは目の不自由な人にとって、とても重要です。点字ブロックの上に自転車が置いてあったり、点字ブロックの上を歩いている人を見かけました。小学生の私でも、点字ブロックの重要性を知っているのに、大人の人は知らないのか不思議です。自分さえよければいいという気持ちですが、障がいをもつ人を苦しめている事に気づいてほしいです。

障がい等のマークで、ヘルプマーク、ハートプラスマークというのを私は知りませんでした。ヘルプマークは、義足や人工かんせつを使用している人、内部障がいやいんしん初期の人など、外見から分からなくてもえん助などを必要としている人が、周りの人に知らせるマークだそうです。ハートプラスマークは、内部障がいがある人が、外見から分からないため、電車やバスのゆう先座席や障がい者用駐車スペースを利用

用する時、また近辺でのけい帯電話の使用などを、周りの人に配りよしてほしいというマークだそうです。

住みやすい町にするには、どうしたらいいか色々調べたり、自分なりに考えてみました。私は、障がいのある人もそうでない人も住みやすいのが一番だと思います。そのためには、もっと障がい等のマークを理かいしてもらおう事、色々な場所にもっとマークをふやすこと、障がいには色々な障がいがある事を知ってもらう必要があると思います。そして、障がいのある人に対して、へん見を持たない事も大切だと思います。障がいのある人もそうでない人も同じ人だという事が、私は一番大切だと思います。

町ではマークや障がいのある人がいないか気をつけ、困っている人には声をかけ、点字ブロックの場所に気をつけ、ゆう先席への配りよなど、一人一人が気をつける事によって、今よりももっと住みやすい町になると思います。私の希望は、障がいのある人もそうでない人も笑顔があふれる町になる事です。

より良い未来へ

わたしは、これまでしよう害者との関わりについてあまり考えたことがなかった。しかしこの作文を通して考えてみることにした。

わたしは、しよう害をもっている人を見ると、かわいそうだな。大変だろうな。というふうに思っていた。学校にもしよう害をもっている友達がいる。その子は、わたしたちの気付かないことに気付いたり、むずかしい漢字も読める。わたしは、すごいなと思う。中には、友達と関わることの苦手な子や、大きな音が苦手な子がいる。その子にはやさしく接し、どうしたら過ぎしやすくなるかを考えることがある。以前に見たテレビでは、足の不自由な方の特集があった。その方は、車いすに乗ったときは、とても大変で辛かったと話していた。また、しよう害をもっているからどうする、健常者だからどうする。という差別がいやだと話していた。車いすに乗っていても、周りの人が同じように接してくれたと言っていた。そのことは、しよう害をもっている人にとってうれしい事なのだと分かった。

郡山市立芳賀小学校 五年 小名 袖月

お母さんが、「しよう害は病気ではなくこせいなんだよ」と言っていた。わたしにも得意なことや苦手なことがある、それは、しよう害をもっている人も同じだ。しよう害をもっている人は不幸、健常者だから幸せということではなく、しよう害をもっている人がどうしたらもっと生活しやすくなり、住みやすくなるかをみんなで考えないといけないと思う。しよう害をもっているでも自分が楽しく生きていく方法を見つけることが大切だと思った。また、しよう害をもっているも前向きに自分の道を歩んでいる人は、世界を明るくできる人だと思う。

しよう害の有る無にかかわらず、おたがい色々な気持ちを分かち合いながら、より良い社会をきずいていきたい。

自閉症の人たちの思い

私のお姉ちゃんは、自閉症です。支援学校に通っている中学三年生です。お母さんにお姉ちゃんの自閉症という障がいについて教えてもらってから、私は自閉症にとっても興味をもっていました。

そんなとき、家にもあった「自閉症のぼくがとびはねる理由」という本を学校の図書室で見つけました。家にあったお母さんが読んでいたものより、読みがなや絵が書いてあり、読みやすそうだったので、さっそく借りて読んでみました。

この本を書いた、東田直樹さんは自閉症で会話が苦手です。会話ができない代わりに、キーボードを使ってコミニケーションをとったり、本を書いたりすることができています。

この本の中で、私のお姉ちゃんのこと不思議に思っていたことがいくつか分かりました。

お姉ちゃんはいつも同じことを聞いてきます。それは、聞いたことをすぐに忘れてしまい、同じことをくり返し聞くという行動になってしまふからです。もう一つの理由は言葉遊びができ、言わされて話す言葉とちがって、それは音とり

ズムの遊びだということが分かりました。なので、お姉ちゃんがくり返し同じ言葉を話してきても、イライラしないで、一緒にお姉ちゃんの気がすむまで話してあげています。そうするとお姉ちゃんは、笑ってくれています。

もう一つは、人の目を見て話さないことです。最初は、私のお話を聞いていないのかなと思っていました。だけど他の人とちがって、人の声を見ているんだということが分かりました。声は見えるものではないけれど、全ての感覚器官を使って話を聞こうとしているのです。だからお姉ちゃんは私の話を聞いていないのではなく、体の全てを使って聞いてくれているんだなとうれしい気持ちになりました。

あとは、お姉ちゃんはカレンダーや人のたん生日を覚えるのが得意です。私はなかなか覚えられないので、よく教えてもらっていて、お姉ちゃんはすごいなと思っていました。それは数字が好きで、楽しいからです。数字は決まっているものなのでお姉ちゃんにとってわかりやすいのだと思います。得意な数字を将来にたくさん使ってほしいです。

郡山市立芳賀小学校 五年 有我 香甫

最後に私がお姉ちゃんについてとても知りたかったことが分かりました。それは、「自閉症の人はふつうの人になりたいですか」ということです。本の中で東田直樹さんは、昔は「ぼくもふつうの人になりたい」と思っていました。それは障がい者として生きるのがつらく、みんなのように生きていけたらどんなにすばらしいだろうと思っていたからです。けれど障がいのある無しにかかわらず、だれでも努力すれば幸せになれることに気づき、今ではもし自閉症が治る薬ができて、ぼくはこのままの自分を選ぶかもしれないと話していました。

私のお姉ちゃんも、いろいろなことをがんばって努力をして、できるようになったことがふえて、笑顔がいっぱいです。きっとお姉ちゃんも幸せなので、このままの自分を選ぶと思います。

「ありがとうの」の笑顔

「いつも押してくれて、ありがとう。」これは、おじいちゃんとお出掛けした時、私が車椅子を押すと、いつもおじいちゃんが私にかけてくれる言葉です。私のおじいちゃんは車椅子に乗っています。歩くときは、つえも使ったりして歩きます。

私のおじいちゃんは、私が生まれる前に、突然脳こうそくで倒れ、左半身がうまく動かせない不自由な体になってしまいました。

おじいちゃんが、病気になる前は、大好きな野球をやっていて、とてもスポーツが大好きだったとおばあちゃんが教えてくれました。障害にも色々あって、生まれつきのもの、事故や病気で急になってしまったもの、色々あると思いますが、おじいちゃんが今まで元気に動いていた体が動かなくなっでしまい、とてもショックだったと思います。

よくおじいちゃんは、私に「いつもパワーをもらっているよ。」と言ってくれますが、今のおじいちゃんは、左半身に障がいがあっても、色々と出来ることがあります。例えば、左手は不自由でも右手で上手に食事ができます。歩くのはゆ

っくりでも、つえを使って散歩も出来るし、車の運転もできます。お風呂も段取りをふめば、一人で入ることができます。私には、開けることができないふたをおじいちゃんは、力があるので開けることができます。

お母さんから教えてもらいました。おじいちゃんは、病気のリハビリをとてもがんばったと話していたそうです。痛いから、出来ないから、障がい者だからとあきらめてしまうことは、とても簡単だし、とても楽なことです。しかし、そうしてしまうと何も出来なくなってしまうので、だめなんだと思ひ、自分をふるいたたせて努力したそうです。

そんなおじいちゃんを私はすごいなと思いました。おじいちゃんは、決してかわいそうなんかじゃありません。障がいを持っていたとしても、出来る事はいっぱいあるんだという事が分かりました。そんなおじいちゃんの姿に私も何事にもあきらめずにがんばろうと逆にパワーをもらっています。

私は、おじいちゃんとよくでかけたりすることがあります。そんなときは、相手の立場になって、何をやってほしいのか？もし自分だったら…と自分に置きかえて考えるように

しています。歩くスピードがおそいなら、私がゆっくり歩けばいいし、足が冷たくなっていたら、ふとんをかけてあげたり、マッサージでほぐしてあげたりしています。車の中では、たいくつしないように、おじいちゃんの好きな曲をたくさん流してあげます。そんな時おじいちゃんは、ニコニコ笑顔でとても楽しそうです。おじいちゃんと過ごすごことで、思いやりの気持ちを学んだし、一緒にいる家族みんなが優しい気持ちになれるし、心が和みます。

大切なのは、その人のことを思い、行動することで、障がいのある人も、暮らしやすい生活になると思います。ささいなことでも、その人にとって助けになれば、きつとうれしいと感じてくれると私は信じています。これからも、障がいのある人を見たら、相手の気持ちになって、自分にできることはあるかを考え、行動していきたいです。そして、誰もがたがいに思いやり、笑顔になるような温かい社会をつくっていきたいです。

努力に脱帽

二年前、おばあちゃんが脳こうそくで倒れました。命に別状はなかったけれど、右手、右足が動かなくなりまして。病院へ行った時「この前まで動いていたのに、何で動かないの?。」と、言っていて泣いていました。ぼくの知っているおばあちゃんは、とってもパワフルで、元気で、前向きで、いつも笑顔の人です。こんなに落ち込んだ顔は見た事がありませんでした。

本格的なりハビリが始まりました。ぼくも病院へ行った時はリハビリを見ていました。動かない足を動かすのは大変で、それでも必死に動かしていました。おばあちゃんは、「車イスは嫌だから、絶対歩けるようになりたい。車の運転もしたい。」と言って、目標を持ってやっていました。パワフルおばあちゃん復活で、病室でもテレビを見ながら、タオルで段差を作って足を動かしたり、折り紙を折って手を動かしたりして、自主練をしていました。ぼくが見に行くと、フラフラだった歩き方が、しっかり歩けるようになったり、速く歩けるようになったりと、すごいスピードで回復していました。

郡山市立大成小学校 六年 國分 昭俊

なみだを流し、努力を続けた結果、三ヶ月後には、右手でも使えるようになり、足は歩く事はもちろん、階段も登れるようになりました。リハビリの先生からは、「あの病状でここまで回復する方は始めてです。努力しましたね。」とほめられたそうです。やっぱり前向きなパワフルおばあちゃん、さすがだなあと思いました。

ぼくのおばあちゃんは、手足が動くようになったけど、病院にはリハビリをしても良くならない人もたくさんいました。そして、そういう現状と向き合い、はげまし続けて、あきらめない先生達もいました。どうやったら動くのか、やる気をUPさせるにはどうしたら良いのか、日々勉強しているそうです。おばあちゃんの先生は、「大丈夫。出来ますよ。」と、いつも笑顔でした。痛いと言つとやり方を変え、やる気を引き出してくれていました。

ぼくの将来の仕事はまだ決めていません。でも、今回リハビリテーション技師に、興味を持ちました。理学、作業療法士になって、動かなくなった体を動かせるようになったら、

いをがんばります。

どんなにうれしいだろう、こういう夢のある仕事なんだって分かったら、興味がわいてきたんです。もう少し、くわしく調べてみようと思います。

もうすぐ、東京パラリンピックが始まります。僕は水泳選手で、オリンピックに出るのが夢です。体が丈夫でも出場は大変なのに、パラリンピックの選手は、どれだけの努力をしているのかと思うと、本当にすごいです。

テレビで出場選手の特集を見ました。片手がなくても泳ぐ選手、義足の陸上選手、車イスのテニスやバスケットボール選手など、たくさんの方が紹介されました。テニスの国枝選手は金メダルや年間グランドスラムを取っているすごい人でした。練習もはげしく、きつく、車イスに乗っていると、思えない動きでした。障害をハンデと考えず、楽しんでいる考えや姿がかっこいいなと思いました。

ぼくは今まで、障がい者の方に対して「大変だな。かわいそうだな。」と思っていました。おばあちゃんも泣いていたし、ずっとそう思っていました。でも「かわいそうな人じゃないよ。がんばっている人達だよ。だから、元気な人がそのがんばりを手伝ってあげれば良いんだよ。」とお母さんに言われて、車イスマークの駐車場にとめない事も、エレベーターのボタンの位置も、点字の上に立たない事も、優しさの手伝いなんだなと思いました。この先もぼくが出来るお手伝

どんな人でも、尊い命

郡山市立郡山第一中学校 一年 橋本 美潤

私の姉は、障がい者です。体に支障がある障がい者ではなく、「知的障がい者」です。簡単に言うと、他の人より勉強ができない人です。私は正直、そんな姉が嫌いでした。何回もていねいに教えてあげるのに、全然できない姉に、怒鳴ってしまうのが日常でした。しかし、ある日、姉が自分の目の前で死んでしまう夢を見ました。その時、自分は大粒の涙を流していました。私はこの時、思いました。「こんな姉だけど、やっぱり死んでほしくない。どんな人でも、その命はとても大切なんだ」と。私はこの日をきっかけに、障がい者がふつうの人と同じように、楽しく過ごせる世界を作りたいと思うようになりました。

今の世界は、「学校で同じクラスに障がい者がいると、その人をみんなでないじめてしまう」というのがたくさんあると思います。その例として、「聲の形」があります。これは、耳が聞こえない女の子に、クラスのみんなが悪戯をしたり、知らんぷりをしてしまう物語です。その一人の男の子は、今までやってしまったことを深く反省し、女の子に謝ります。そ

の男の子は、「たぶん、君と仲良くなりたかったんだと思う」と言っていました。が、いじめるのは良くありません。このような考えの人は、他にもいるのではないのでしょうか。「仲良くしたいのに、嫌なことしちゃった」というのはよくあることです。だからといってやるのはよくありません。やられたほうは、とても傷つきます。障がい者は、好きで障がいを持って生まれてしまったわけではありません。後天的な障がい者もそうです。そして人の命は全て大切なものです。障がい者は死んでしまってもいい、という考え方は間違っています。障がい者は、必死でみんなと仲良くできるように努力しています。知的障がい者のように、何回もきちんと教えても全然できない、という人に怒りを持つのは分かります。しかし、その人は必死に理解しようとしています。それをもう一度考え、心を落ち着けてほしいです。一人で教えるのが無理なら、他の人と協力して教えれば良いのです。周りの人も無視しないで、助けにいきましょう。そうすることで、みんな平等に過ごすことができます。

人はみんな違うからこそ良いのです。逆にみんな同じだったら、気味が悪いです。この世界には、凡人や天才、凡人以下の人、LGBTや障がい者など、たくさんの方がいます。みんな違う感情を持ち、違う考えを持っていて、性格も体格も違います。クラスに変な人がいても、「変人だからいじめよう」と思うのではなく、やさしく見守っていた方が良いと思います。「だれかの悪口を言ったら自分も言われていると思え。自分がやった行いはだれもみていないと思え。空、床、壁、そして自分自身が見ている。悪い行いをしたら、いつか自分に返ってくるよ」と母に言われたことがあります。その時は、まだ小さいころだったので、意味が分かっています。そんなのでした。しかし、今はその意味がよく分かります。刑事ドラマでは、人を殺してしまった後、必ずとっていいほど後悔しています。いじめもそうです。「あの時、ああしていればな…。何でいじめちゃったんだろ」と絶対後悔します。いじめようとする前に、自分の胸に「今これからすることは、本当に正しいのだろうか。やったとして、後悔はしないのか。自分がやられたら、嫌じゃないのか」と質問してみてください。きっと、「今これからしようとしていることは間違っている」といつか考えになるはずです。いじめをしてみましたら、素直に謝り、罪をつぐなってください。

これらが、私の考えた、「障がい者がふつうの人と同じよ

うに、楽しく過ごせる世界」の作り方です。これは、ふつうに起こりうるいじめにも有効的です。私たち人間の命は、どんな人でも尊い命です。そのことをもう一度頭に入れ直し、障がい者について深く考え直してみてください。

今の町は暮らしやすい？

郡山市立郡山第一中学校 一年 佐藤 カエラ

私がまだ小学校一年生の頃、「車いすバスケット」を体験した。この体験のきっかけは母だった。

「これに応募してみる？」

珍しく母が学校からもらったプリントに応募しようとしていることに驚いたことを覚えている。

「何、これ？」

そのプリントは、車いすバスケットを体験してみようという内容だった。もともと私の父はバスケットボールが好きで、よく体育館に行っては練習していた。その影響で、私もバスケットボールが好きだった。

「夏休みだし、体験してみたら？」

「うん。」

こうして特に何も考えず私は返事をした。車いすバスケットの体験に当選したと分かったのは結構後だった。

山道を走っている。見慣れない風景に私は不安を覚えた。どこに行くのと聞こうとしたが声にはならなかった。

「降りて。」

車から降ろされた。目の前には白く大きな建物が広がっている。なぜか私は、訳もなく心がはずんでいた。

館内に入ってみると、郡山市という市民文化センターのよな所だった。思った以上に広くて驚いた。どんどん奥に進んでいく。二分くらい歩くと大きな扉があった。開けてみると、車いすが何台もあった。人生で初めて車いすを見た私はその時、

「これで本当に動けるの？」

と思っていた。

「では始めます。」

とマネージャーのような人と、車いすに乗った男性がでてきた。その男性は車いすバスケットをしているらしい。

「車いすになった時はとても大変でした。」

男性は今までの経験を話してくれた。そして車いすで移動するときのコツを教えてくれた。

「では、実際に車いすに乗ってみてください。」

初めての車いす移動は思った以上に楽しかった。自分の手

で車輪を回して前に進めたときはとても感動した。しかし、今思うと車いすで生活するということはとても大変だと思う。なぜなら、自分の体重を手だけで動かさなければいけないからだ。

このことを考えてみると、私達が住んでいる場所は車いすの人にとって住みやすい場所だろうか。また、車いすに限らず、目が見えなかったり、耳が聞こえなかったりする人達にとってもどうだろうか。少なくとも住みやすいとは言えないと私は思う。私の家の近くだけでも大きな段差があったり、信号を渡った直後に大きな穴のようなものがあったりして、転んでしまったり、誤ってけがをしてしまいかもしれない場所がいくつも挙げられる。

私が車いすバスケットを体験してみて、今この町や県について考えてみると、たくさん課題が挙げられる。私達にとっていくらか住みやすくて、車いすで生活している人や、目が見えづらかったり、耳が聞こえづらい人達にとっても住みやすくなければ意味がないと思う。最近、信号が青になると音が鳴る装置がつけられたり、車いすの人達のために広いトイレが設けられたりしている。しかし、この設備もまだ少ない。

これからの社会を更によりよいものにするために、私達は自分のことばかり考え、動くのではなく、自分以外の人達の

ことを考え、思いやり、考え、助け合いながら「共生」していくことが大切だと思う。

私の伝えたいこと

郡山市立郡山第五中学校 三年 吉田 紗彩

私の友人に生まれつき耳に障がいを持っている女の子がいます。彼女の聴力は、補聴器を装着していても話している内容が分かるなどではなく、言葉が音として聞こえる程度です。だから、彼女は普段手話を使用して会話をしています。私は彼女ともっと会話したい思いから、手話を日々勉強しています。私には、彼女との関わりの中で起きた体験や日々の会話を通して、考えた事や感じた事で、誰もが平等で差別のない社会の実現を目指す為に多くの人に伝えたいことがあります。

伝えたいことができなかつたことは、とある体験からでした。私は休日に予定が合い、その友人とショッピングセンターへ出かけていました。休日ということもあり、子供連れの家族などでショッピングセンター内は賑わっていました。私たちは、小腹が空いたのでアイスクリームを食べるためフードコートに行き、座りながら手話で楽しくお互い近況報告したり雑談をしていました。そんな時、横のテーブルに座っていた

年配の女性二人が私たちを見ながら会話をしていました。そしてその一人がぼそっと呟きました。「可哀想ね。耳が聞こえないなんて」と。彼女は聞き取れなかったらしくなんとも無さそうでしたが、私は悔しさと怒り、悲しさでいっぱいでした。私は考えました。何故耳が聞こえないことが可哀想という言葉で連想させるのだろうか。それは、耳が聞こえないことや聴覚障がいのことを欠点だと認識しているからこそ出る言葉なのではないだろうか。私は、耳が聞こえないことは欠点だと思いません。確かに、健康で何も無いことが、一番望ましいことです。ですが、誰も望んで障がいを持って生まれた訳ではありませんし、誰にも非は無いです。この事を一人一人がきちんと理解することが、平等で差別のない社会への第一歩なのではないかと私は考えています。又、手話は、聴覚障がいを持つ方のためだけの、限定的なコミュニケーションツールでは無く、日本語や英語などと同等に一つの言語であると私は考えています。言語には障がいの壁はあ

りませんし、あってはいけないものであると思います。

私は彼女に、一番嫌なこと、辛いことを聞きました。この質問に対して彼女は、「障がいへの知識がない故に、偏見や先入観だけで関わりたくないと思ったり、距離を取られることが一番辛い。」と答えました。この解決方法は一つしかありません。それは、知ることです。聴覚障がいとは、どのようなものなのか、やどんな風に会話をしているかなど自分が関心を持ったものからでいいのです。知ることによって偏見も抵抗も無くなっていき正しい理解ができるようになるのです。そして、正しい理解こそが平等で差別の無い社会を生むと私は信じています。

これらの三つのこと、障がいは欠点ではなく個性であること、手話は一つの言語であること、まずは知ることから正しい理解が得られるということを私は広く知ってほしい、伝えたいと思っています。一人の深い理解よりも大勢の方に少しでも理解する方が平等で差別の無い社会を目指す上で大きな力になると思います。是非三つのことを念頭に置いて、障がいに向き合ってください。それらは、より広い視点と見方の助けになることでしょう。

やさしさあふれるまちにするために

郡山市立郡山第七中学校 一年 菅原 嵩史

僕の祖母は、両手両足、全ての指が斜めに曲がっています。

「関節リウマチ」という病気で、免疫の異常により、手足の関節が腫れて痛み、骨や軟骨が壊れて関節が動かない病気です。完治は難しく、月に一度、点滴治療に、お母さんが働いている病院に通っています。

手足に力が入らないので、立ったり座ったりするだけでも苦労しているし、寒い日は痛みが辛くて起き上がれない時もあります。

それでも、お母さんが仕事でいない日は、動かない手を一生懸命に動かして、僕たちに美味しい料理を作ってくれます。それだけではなく、僕の体調を気遣ってくれたり、学校での悩みを聞いてくれたりするやさしい祖母です。

だから僕は、祖母のためにペットボトルを開けたり、歩く時はゆっくり歩幅を合わせたり、重い荷物を全て持ちます。僕たちにとってはペットボトルを開けることなど、いとも簡単に出来ることです。でも障害者にとってはとても難しい

作業なのです。

日々の生活の何気ない事が、障害者にとっては試練なのです。

僕の通う中学校にも、一つ上の学年に左足の不自由な先輩がいます。家が近く、小学校も一緒に、足が不自由でも、いつもサッカーで遊んでいる元氣な先輩でした。

中学校まではかなり距離があり、僕の足でも二十分ぐらいかかります。その先輩は友達と登校していますが、僕よりも二十分以上早く家をでています。

障害者は、僕たちと全く同じことはできないけれど、僕たちが手助けをすることで、同じように生活することは可能なのです。

やさしさあふれるまちにするために僕が出来ることは、大きなことは出来ないけれど、障害者に寄り添える、思いやりの心を持つことが大事なのだと思います。

そのためには見ているだけ、考えているだけではなく、行

動を起こす勇氣、どうすれば障害者の人と僕たちが共生できる明るいまちづくりが出来るかを考えて行く事が大事だと思います。

それを実現するために、僕は道徳の授業で、障害者の人と話し合いの場を設けることが良いと思います。

やはり、何をすべきかは、その人に聞かないと分からない事が多いと思います。その中で中学生である僕たちでも出来ること、学校全体で出来ること、地域の方々に協力してもらえばできること、色々なアイデアを出し合って、よりよいまちづくりを目指していければ良いと思います。

人々が住み、生活することによって、まちはつくられます。一人一人の小さなやさしさが、やがて大きなやさしさの輪となり、それがやさしさあふれるまちづくりにつながると僕は思います。

今はコロナ禍で、殺伐とした暗い雰囲気で見えない未来が見えませんが、僕はこれからも思いやりの心を忘れず、人と接するようになりたいです。

障がい者と暮らす

郡山市立郡山第七中学校 三年 相楽 雛那

私には重度障がい児の兄がいます。兄は身長は大きいのですが、手足を使うことがないので手足は小さいままです。筋力もあまりありません。そんな兄と暮らしてきたなかで感じたことを読んでいる方に伝えたいと思います。

昔の私は兄の状態を理解することができず、兄の手を動かして物を持たせようとしていたりしていました。お店や公園に行く時にはバギーという車いすに乗って移動するので行ける所が限られます。それが気に食わず、駄々をこねることもありました。

この頃の私にとって一つの気づきがありました。それは他の家族に必ず兄のような障がい者がいるというわけではないということ。兄のリハビリについていくと、兄と同じような子供達が多くいたので、みんな同じなんだと思っていました。ですが、兄と一緒に出かけをすると、他の人からの視線があることに気づき、それと同時に気づくことができなくなりました。その視線は不思議なものを見るようなもので、私はこの視線が嫌いです。兄が見られているのに、自分に向けられて

いるような気がしてしまうからです。変な家族などと思われるのではないかと心配になることもよくあります。

兄は台風が近づいたりなどの天候の変化により、発作が起こる回数が増えてしまいます。この発作は夜中に起こることもあるので、眠ることができない時もあります。

兄を車に乗せたりなどするときには、とても体力を使います。体重は三十キログラムほどで、軽いと思う方もいると思いますが、身長はほぼ百六十センチほどあるので、抱っこをして移動する時にはとても苦労します。

兄のような重度障がい児は、風邪を引いたときに肺炎になることも少なくありません。兄は一度だけ肺炎になってしまったことがあるのですが、そのときは少しの間、入院をしていました。臓器も通常に比べ免疫力が弱いということもあるので、ただの風邪だったとしても気を抜くことはできません。このように家族に障がい者がいると、苦労する場面がよくあります。ですが、普通とは違うからこそ感じる幸せがあります。兄の近くに行くと、家族の誰もが眠くなってしまいま

す。それほどに、兄からは穏やかな雰囲気を感じる事ができるのです。兄のおかげで場がなごむこともよくあります。

今の私が一番思うことは、可哀想な家族とは思われたくないということ。確かに周りから見れば苦勞しているだけにしか見えないかもしれませんが、障がいを持っているからといってどこにも行けないわけではありませんし、プールに入ることや、動物達と触れ合うこともできます。遊園地だってメリーゴーランドなどには乗ることもできます。できないことが多かったとしても、何もできないわけではないということを知ってもらいたいです。

もっと認知度が上がってくれるといいのにといつも思います。認知度が上がってくれると気軽に行動することができるようになると私は思います。お店でなかなか重度障がい児を見かけることはありません。ご飯の時間やオムツ交換などができる部屋が増えたりしてくれると、もっと障がい者に優しい社会になります。

障がい者にとってより優しい社会になることを私は願っています。



【佳作】

ぼくの祖父

ぼくは、二才の時にコンクリートのセメントの部分がかわいていない状態の所を触ってしまい、つめがはがれるほどの大やけどを負いました。あの時は絵が描けると思い、とっさに手が出たのを今でも覚えています。両手に包帯をグルグル巻かれた写真を見て、母が「もしかしたら関節が一生曲がったまま、治らないと医者から言われたのよ。」と話していました。今では手もすっきりきれいに治りましたがぼくも障がいを持つ可能性があったということをしみじみと感じています。

次の年、祖父が仕事中にけがをしました。祖父は二十才の時に左手の指を全て切断していて、くっつけたため、左手はありませんでしたが、関節が曲がった状態でした。その左手の部分にペンキをぬる強い力のスプレーガンがあたってしまい、きん急に手じゅつをしました。左手を全てうしなう所だったそうです。しかし毎日くだを通して治りようし、薬指一本のみですみました。ぼくはその時三才でしたが、母といっしょに

郡山市立小山田小学校 四年 長嶺 利央

病院に行ったことは覚えていません。このことで祖父は障がい手帳を持つようになりました。左手はほとんど使えず、力も入らないようですが、見た目は変わりありません。今でも元気にしています。これからもずっと元気であってほしいと思っています。

この二つの経験を通し、日々生活していると、いつ、どこで、大きな事故や、けがが起こるか分からないし、障がいを持つかもしれない、自分の身に起こるかもしれない、ということを感じるできませんでした。障がいも、見た目ですぐ分かる人、分からない人、また、身体ではなく、知的、発達、病気、いろんな種類があることを母から教えてもらいました。障がいは、本人しか痛みや苦しさが分からない部分はたくさんあると思いますが、少しでも気持ちをはかるようになりました。

祖父は家にいる時は何も手につけていませんが、出かける時は手ぶくろをしています。夏の暑い日も毎日つけています。

太ももから肉をとり、左手の甲の部分に付け足したため、盛り上がっているからです。まだしびれが時々あるようで、「痛い、痛い。」と言っている時もあります。ふだんは笑って明るい祖父ですが、一人の時は、痛みにがまんしているのかなと思う時があります。祖父は、右利きなので生活面では自分のことは行うことができます。運転もできます。でも前より力がなくなり、できなくなってしまうところもたくさんあります。

僕は、祖父に夏休みたくさん遊んでもらいました。プールにも毎日のように連れて行ってもらいました。習いごとの送りむかえもたくさんしてもらっています。ふだんは照れくさくて言えないけれど、感しゃの気持ちでいっぱい大好きです。祖父は障がい者となりましたが、まだまだぼくの方がお世話になっています。いろんな面でできない所があるけれど、祖父の左手で不自由にしていることがあったら気付いて力になれる所はしてあげたいと思います。

障がいを持っている人も持っていない人も同じ人間であり、毎日いろんな思いや考えを持ち生きています。ぼくは、障がい者だからかわいそうとは思いません。障がいと上手く向きあいちよう戦っている人がたくさんいることに、そんなけいしています。逆にぼくが勇気づけられています。これから

も互いに気持ちを思いやり、共有しあえる関係をつくっていったらと思っています。

実用性のあるバリアフリーへ

私たちの身の回りにはたくさんバリアフリーがあります。例えば、段差をなくしてスロープにしたり、目の見えな人が文字を読むために点字をつけたり、安全に歩くために点字ブロックがつけられています。バリアフリーがあるおかげで一見、障がいのある人も不自由がなさそうに見えるけれどそうともいきりません。

私はお店で車イスに乗った人が、困った顔をして大変そうなのを見かけました。それはスロープを利用しようやくお店の入口にたどりついたときのことです。買い物カゴをひざの上のせて車イスを一人でこぎながら買い物をはじめたときのことです。人混みの中前に進むのも大変なうえ、商品の並んだちゃんつ棚は、車イスの目線よりも高く取りづらそうでした。カゴに物が入ると重くなりバランスをとるのも大変そうでした。それからレジに並び、お会計をする時も自分でカゴを持ち上げ台にのせバッグに入れかえ持ち帰らなければなりません。店員さんのいるレジであれば手伝ってもらえ

ることもあるかもしれませんが、混雑していればたのむこともためらってしまいます。店員さんがいないセルフレジでは、すべて自分でやりとげなければなりません。セルフレジのタッチパネルまで手がとどかないこともあるかもしれません。自分だったらカートにカゴを入れて簡単に持ち運べるし、聞きたいことがあれば店員さんをすぐに呼びに行くこともできます。健康な人にとってあたりまえのことでも障がいのある人にとっては結局バリアフリーのその先には、何倍もの苦ろうを要します。

見た目だけのバリアフリーに満足するのではなくその先に目を向けた実用性のあるバリアフリーが必要だと思えます。お店側も対策を考えていくべきだし、自分にもできることがあればそっせんして手を指しのべるべきだと思います。ふだんあたりまえのことでも意外とできていないことが多いです。まずは自分から、そして自分だけでなく、まわりの人の協力を自然に得られるようになることが本当の意味で

郡山市立桜小学校 六年 松浦 悠花

のバリアフリーだと考えます。こついった考えが身近なところから広がり、世界に伝わればいいなと思います。

心と心をつなごう。人にやさしいまちづくりに向けて。

郡山市立富田東小学校 六年 大迫 楓

私は障害者について、四、五年の時に調べ学習をして、紙にまとめた時があります。

私は、障害者の事を前に学んだからこそもっと障害者の気持ちについて考えてみようと思いい、この思いやり作文を選びました。他にもきっかけがあります。私は障害者ではないけれど食物アレルギーというものを持っていて少しでも障害者の人の気持ちに共感してあげられて一人でも多く、障害者への人を思いやるやさしさを持ってもらいたいと思ったからです。今言った食物アレルギーを持つ私は食べれない食べ物がいくつかあるので、時々何か言われないか不安になります。三、四年の時には、私が給食の時にみんなとちがうものを食べていると友達から「〇〇がきらいなの？」と誤解されてしまったり相手がきらいな食べ物があったままアレルギーだったから、「私もアレルギーが良かった。」などの言葉もあります。このような誤解はきくと障害者の人にもあるでしょう。耳が聞こえない場合、相手から見ても耳が聞こえないと

は分かりません。その結果、無視されているように思われ、友達との仲が壊れる可能性が出てくるのです。それは、障害者にとって、とても悲しい事です。見ただけで自分で勝手に判断するのではなく、理由があるのかな、といったん考えてから紙に書いて見せてあげたり、「大丈夫？」と声をかけて相手に寄りそう事が大切です。相手の事をきちんと知り、行動する事で障害者にとって暮らしやすい社会になるための第一歩になると私は考えます。

一方、「バリアフリー」というものもあります。バリアフリーとは、障壁となるものを取り除き、生活しやすくするという事です。

バリアフリーには高齢者や障害者のために作られたものがたくさんあり、スロープや点字ブロック、手すりなどさまざまな場所で見かけます。このような事は、人にやさしいまちづくり（バリアフリー社会）に少しずつ近づいている証拠です。そして、一人一人がきちんと親切な心を持ち、声をか

け合うことでもっと生活が豊かになるのだと思います。障害を持っていての方でも心のバリアフリーがなくなり、今の生活に自信を持ってもらえるかもしれません。また、このまちづくりを実現させるためには住まい、こころ、まち、もの、情報、社会、交通という、七つのバリアをなくす必要があります。「もの」では、身近に使う物の不便をなくし、「こころ」の場合は、高齢者や障害者に対する私達の心のバリアを取り除くなどの事です。ここから人にやさしいまちづくりをするには、スロープや点字ブロックなどの設備を使ったバリアフリーだけじゃなく、心を使ったバリアフリーも必要だと言ったことが分かります。

私は人を思う心が大切だと思ったきっかけがあり、気づいたことがあります。

それは、下校の時に見かけた女の子の姿を見て障害者に対する見方が変わった事です。私は六年生になってからの下校で初めてその女の子を見かけました。その女の子は障害者らしく、大人の人に支えてもらいながらゆっくりと歩いていました。そのころの私はかわいそう、大変なんだろうなという心配の気持ちでした。次の日の下校でも女の子を見かけました。そこに複数の子供達が走っていくのが見え、その子供達の目は幸せに満ちあふれ、一方女の子は必死に頑張っているような目でした。私の気持ちが変わったのはここからです。女

の子が公園につき、ベンチで楽しそうにいっしょに来た大人の人と話しているのを見ました。この時私は障害者でも頑張ってるかみ取れる幸せがある、毎日頑張ればその頑張りは大きくなる、女の子を見てそう思えました。

人にやさしいまちづくりを実現するには、人を思いやる気持ち、心と心をつなぐ事が大切です。障害を持っている人もやさしく接し、相手の事を理解する必要があります。私も障害者と言葉、心を通して心のバリアフリーを意識しながら、関わっていきます。

「平等」な人生

郡山市立橘小学校 四年 佐久間 奏甫

ぼくは、障がい者には直接会ったことはありませんが、テレビ局で働いている父が取材した人のことを教えてもらい、この文章を書きました。

その人は、目が見えない障がいを持つわたなべたけしさんという人です。福島県二本松市にある母校、二本松第一中学校で講演を行った時の言葉がぼくの心に一番のこりまりました。それはたけしさんが大事にしている、「知・体・心」の説明です。「知・体・心」を大事にすると、出会いがある。出会いがあることで、人生がゆたかになる。ぼくはこの説明をきいて、たけしさんは、目が見えないことすら出会いの一つだと思っていると思いました。このことも自分の出会いの一つだから、人々にかわいそうだと思われなくても大じょうぶ。そんなことをたけしさんが言っていると思いました。

すごいと思ったところがありました。たけしさんは「はり師」、「きゅう師」、「あんま・マッサージ・指圧師」の国家資

格者で、「銀の森治療院」の院長です。目が見えなかったら、もしぼくが目が見えなかったらむずかしいことだろうと思うのに、たけしさんは楽しそうに、スムーズに仕事をこなしていました。もしぼくがはり師などを学ぶとしたら、たけしさんに教えてもらいたいです。

そう言えば、道徳の時間に、ぼくの友だちが、足をけがしていることをあまりかまわないでほしいと言ったことがあります。この気持ちはたけしさんが思っていることと同じじゃないのかなと思います。だれかにずっとかいごされていたら、ぼくも、きつとみんなもいやだと思います。でもほどよかったですらうれしいのかな。そんな気がします。

たけしさんは全国盲学校弁論大会に出場した時に、「娘が『目が見えなくてもパパはパパ。私がパパの分まで見てあげよう!』と言ってくれました。」とスピーチしていました。

ぼくはこの言葉をきいてすごくすばらしい家族だなと思

いました。たけしさんは、娘さんにこのように手引きをしてもらった時に「自分はちゃんと家族にたのもしいせなかをみせられているのか。」とハツとしたそうです。たけしさんはこのことを、まっくらだった自分に、月の光がさしこんでくるような気持ちだったといいます。目をさましたたけしさんは、盲学校でもう勉強をして、3年間の間に3つの国家資格をとりました。ぼくは、その話を聞いて、このさきどんなことなんがぼくの前にあらわれても、このたけしさんの言葉を思い出せばたちむかうことが出来ると思います。

たけしさんの母校での講演を聞いた人や、銀の森治療院でたけしさんの治療をうけている方々は、みんな「たけしさんがポジティブなおかげで自分もポジティブになれる。」「自分がいかにど力がたりないか思いしらされる。」「などと言っています。ぼくは、たけしさんは3つの国家資格がいかに、人をポジティブにする資格があると思います。やっぱりたけしさんはすごいな。

ぼくは、たけしさんの講演や、スピーチなどを聞いて、この人は障がい者だからかわいそうだ。助けが必要だ。など決めつけずに、みんな平等な社会をつくりあげていくことが重要だと思います。ぼくたちはオリンピック、パラリンピックという平等な社会をつくっています。そこからどうはってん

させていくかがカギです。ちょっとした手助けは必要ですが、そのあとは、平等化した、どの人にとっても住みやすい世界ができています。ぼくそう信じてます。ぼくは、たけしさんに会って、どうやったら平等になるのか、どうやったら住みやすくなるのか、考えて、それを実現できるようにしたいと思います。

心に障がいのある弟でも

郡山市立薫小学校 五年 小西 唯月

『障がい』ときくと、みなさんはどのようなイメージをもちますか。私には、弟がいます。その弟のことを紹介させていただきます。

私の2才年下の弟は、自閉症と知的障がいをもってうまれてきました。なので、私とは別の小学校に通っています。弟は、人に上手く物事を伝えるのが苦手です。でも、一生懸命に伝えようとすることがとても可愛いです。私は、今までの七夕に『弟がもっとおはなしが上手になりますように』とお願いしてきました。すると、本当に願いが叶ったかのようには、おはなしが上手になってきていてとても嬉しいです。でも、世の中にはこんなことを言う人もいます。

以前、私の学年が体育をしている時、支えん級に通っている男の子がさわぎだしてしまいました。「どつしたんだろっ」と思っている私の耳に、「うるさい」と笑う声が聞こえてきました。私はその事がしばらくたった今でも許せません。なぜなら、弟に向けて言われている気がしたからです。弟もちょっとさわいでしまいます。すごく小さい声だったのであま

り周りに聞かれてなかったかもしれないけど、聞こえた人は不快だったと思います。

弟は、最近とても上手に話せます。私は弟との会話や言葉などでいろいろなことを感じました。特に心に残っているのが三つあります。一つ目は、『こたや』と言う言葉です。これは、弟が自分でつくった言葉で、いやだという意味だそうです。こういったものを聞くと自分なりに人に物事を伝える工夫をしているのかなあと、とてもほっこりした気持ちになります。二つ目は出来事なのですが、母の日に弟と手紙を書いていました。私が、「いつもありがとう、書いて？」と尋ねると、「いつもありがとう！」と笑いながら便線に文字を書いてくれます。すると、次の行に何かフニャっとしたまるでリットルのような字をつなげて書いていました。私はとてもびっくりしました。弟は、便線に文字を書いていたのです。筆記体のような文字でした。私の手紙を真似しているつもりなのか、自分なりの文字を書いているのか、どちらにしるその発想がすごいと思いました。それにとっても可愛いのです。最

後の行まで書くと、「できた！」と言って新しい便線にまた文字を書き始めたのです。わたし時にお父さんとお母さんにみせました。やはりとても感げきして、かざっています。三つ目は、歌です。私がたん生日の時に、弟はハッピーバースデーの歌を歌ってくれます。でも、私の名前ではなく弟の名前で歌うので、いつも「姉ちゃんだよ」と言います。するとちゃんと言いなおしてくれる時もあるのですが、大体は言いなおしてくれません。でも、以前は歌ってくれなかったので、歌ってくれるだけでもいやされます。ダンス付きの歌のときは、おどってくれました。すごく可愛くて、つかれた時のいやしになります。

私が願うのは『障がい者をいじめる人がいなくなる』ことです。昔からずっと変わりません。弟には、ひどい事を言われた分、幸せになってほしいです。言ってしまった人達には、そのことを後かいし、反省してほしいです。そしてみんなに、もしも自分が障がい者で、いじめられたらどう思うのか、立場を逆にして考えてみてほしいのです。

私は、この先弟がいじめられたら必ず助けに行きます。弟が悲しい時は、私も悲しいのです。私は、弟が大好きです。一生けん命に伝えようとすると、とても優しいところも、弟が怒られている時に私の後ろにかくれるところも、弟だから可愛いのです。障がいがあっても弟はとても可愛いで

す。みなさんも障がいのある人とふれあってみてはいかがですか。何か感じたり、新しい発見をするかもしれません。

知らせるマーク

郡山市立郡山第三中学校 三年 小野瀬 純愛

世の中には「ヘルプマーク」や「マタニティマーク」など、鞆や衣服につけて障がい等を知らせるマークは様々ありますが、皆さんはエスカレーターの絵と共に「わけあってこちら側で止まっています。」と書かれたマークを知っていますか。

私はこの間駅のエスカレーターである男性を見かけました。その男性はエスカレーターで歩くことなくただ左側の手すりにつかまりエスカレーターを利用していました。私は最初、地方によって立つ位置が違うからこの男性も他の地方から来たのかなと思いました。でも、その男性の鞆には「わけあってこちら側で止まっています。」と書かれてあるマークがついてありました。私はその時初めて見たマークの「わけあって」という言葉やそのマークについてが気になり調べてみると、怪我や麻酔などの身体的事情がありどうしても左右特定の位置にしか立つことができないことを知らせるマークだと書いてありました。

このマークひとつで相手が何故周りとは逆の位置に立っているのかを知らせるとても便利なマークですが、そもそも

エスカレーターは片側を空け急いでいる人は空いている方の片側を歩いて上ったり下ったりする乗り物ではなく、手すりにしっかりつかまり、歩かず立ち止まって乗るのが本来のルールです。すなわち左右どちらにも乗ることができるようになっていますが、片側を空け急いでいる人は歩くという長年の定着が出来てしまいこのようなマークが生まれたひとつの原因ではないかと私は思います。

もしこのマークに気づいていても「この地方は右側だから右に並べ！」や「急いでるからどいてくれ！」などの文句を言ってきた人がいたとしたらマークをつけていた人は驚きや困惑が生まれると思います。また文句を言わないで邪魔だからと急に押ししたりしたら障がいを持っていない健常者でもバランスを崩してしまいます。マークをつけていた人は尚更片方の体ではバランスが取れないため転んだりして事故へ繋がる可能性があります。

こういった、健常者による思いやりのない言葉や行動を見て悲しくなる人、不愉快な思いをする人は沢山いると思います。では、こういった行動を少しでも減らすのはどうしたら

いいのでしょうか。私は、私なりにできることはどんなことか考えました。まずは様々なマークの認知。そして、相手を思いやることが大切だと思います。迷惑行動をしてしまう人達は相手の気持ちを考え、思いやりある行動ができないから起こってしまうものです。誰もがこのことをわかっているはずなのに、実際はなくなったりしていません。当たり前のことができない人がいなくならないのは、自分が障がいを抱える人と関わりがなかったり、障がい者の方々をしらないからだと思います。

もし自分自身が障がい者だったとしたら障がいを抱える人の気持ちがわかるだろうし、身近に障がい者の方がいるのならその人のために何ができるか考えerと思います。自分達によって支えられている障がい者の方々がいることに気づき、自分ができerことに気づき、自分ができerことは何なのか考えることは私達健常者にとって大切なことだと思います。

私は、マークをつけている障がい者や妊婦など関係無く全ての人々に対して何にか文句や訴えをする前に自分自身で何か人のためにできerことに気づき、声をかけ手伝ったりすることが大切だと思います。そして、全ての人々が配慮をし、皆が住みやすい明るい世の中になればいいなと思います。

「普通」はない

私は今まで、特別支援学級の子たちとの交流、聴覚障がい者の方の授業、テレビでの取り上げなどを見てきて、「障がい」について色々と学んできた。

そんな中私は、改めて「障がい者の方をどう思うか」などと問われても、「何とも思わない」と答えるだろう。だが、それは決して障がいに対して無関心などという意味ではない。

今まで特別支援学級の子に心無い言葉を投げかけている同級生を幾度となく見てきた。小学生の頃は、そんな光景を目の当たりにしても、疑問は抱くものの、人の意見に流されてしまいどう対応すべきか分からなくなってしまったことがあった。普通と違うと思っているからあそこまで貶すのだろうか。発達が遅いだけで悪口の対象になってしまうのか。

私がそう思い悩んでいるタイミングで一番下の妹が支援学級に入った。私は怖かった。明るく元気でかわいい妹が、たった一つの固定概念によって理不尽に傷つけられることを想像して。今まで見てきたことを小さな妹にされるのかも

しれないと考えると、とてもとても悲しかった。

障がいがあるから、発達が少し遅れているから、感じ方が違うから、それをどう思つかと言われても、私には分からない。何か一つ人と違うだけで嫌味を言われる筋合いはない。みんなそれぞれの価値観だってある。目がみえなくても、耳がきこえなくても褒めてもらえたら誰だって喜ぶだろう。人間の本質はきつと変わらないんだ。

私が一番言いたいことは、普通なんてないということだ。男女の恋愛が普通でもない。自身の足で歩けることが普通でもない。毎日食べられることが普通でもない。みんなの思っている普通は一つの例に過ぎない。だからもちろん例外がある。その例外をしっかりと理解することが大切だろう。

障がいを大きな壁などとは思わず、自分とは違うと思わず、同じ目線で接することのできる世の中になってほしいと、私は思う。

「意識」

郡山市立郡山第五中学校 三年 小野 泰耀

「障害者。」

「障がいのある人。」

あなたは、この言葉を耳にしたとき何を想像しますか。「自分とは違う人。」「普通じゃない人。」「たくさんの言葉が出てくると思いますが、本当にそうでしょうか。その言葉は正しいのでしょうか。」

私の体験談をお話しします。私は二週間、病と闘うために入院していた時期があります。それはもう大変な毎日でした。痛む体を引きづりながらもリハビリに励んでいました。ある時、リハビリとして病院内を散歩していたら「足の無い」人に会いました。その人に案内され、連れていくとたくさんの「障がい」を持つ人に出会いました。体の一部が無い人や精神的に障害をもつ人など様々な人がいました。そして私は気付いたのです。「みんな楽しそうに笑っている」ということを。それは当たり前だろと思う人もいるかもしれませんが。本当にその風景は当たり前ですか。

私は自分の街でも「障がい」をもつ人に出会います。最近

では目の不自由な人に出会いました。黄色い点字ブロックの上を歩いていました。私も歩いていたため避けてあげると音で気付いたのか「ありがとう」と言ってくれました。でもその顔は笑っていませんでした。

私は今、二つの体験をお話ししました。今これを読んでいるあなたにお聞きます。一つ目と二つ目の違いはなんですか。なぜ一つ目に話した人達は笑っていて、二つ目に話した人は笑っていませんでしたか。

私は思います。「障害者」が笑っているのが当たり前ではないこの時代にどうやってたら笑顔を作り出すことができるのか。それを考え、実行するのが今を生きる者たちの使命であるということ。

「意識」してください。彼らも同じ人間であることを「意識」してください。病院内で笑っていられたのは彼らが「意識」されていたからです。それと同じで街にいる人も「意識」してあげてください。きっと笑顔が生まれるはずです。最初に出てきた言葉のように何が正しい言葉かは私も分かりま

せん。でも実行すべきことは明白です。「意識」をするだけで彼らは苦しまないのです。別に特別な「意識」はしなくていいです。対等に扱うという「意識」をしてあげてください。何度も何度も言います。だから、何度も何度も行ってください。「意識をする」を繰り返してください。

私の祖母

私の祖母はある病の後遺症が残っています。その病は「くも膜下出血」です。かなり有名なので聞いたことがある人が多いのではないのでしょうか。これから、そのくも膜下出血のこと、その後遺症について話していきます。

では、くも膜下出血とはどのようなものでしょうか。くも膜下出血とは、脳を覆っている組織の内側層と中間層との間にあるすき間への出血です。こうなる原因で最も多いのは、動脈のこぶの破裂です。通常、動脈が破裂すると、突然の激しい頭痛が起こり、その後に短時間意識を失います。私の祖母も、たおれてしまい、そこから救急車で運ばれたと聞きました。ちなみに「激しい頭痛」とありますが、その痛みは、バットで殴られたような痛みらしいです。想像するだけでもその痛みが伝わってきて、つらかったことが分かります。

次に後遺症についてです。特になりやすいと言われているのは、言語障害です。私の祖母も後遺症で言語障害が残ってしまい、もう、ふつうにしゃべることすら出来ません。もちろんそれを知ったときは、悲しみと悔しさがあふれてきま

した。もう前のようにしゃべれない。いつものように、出掛けることも出来ない。その思いで心がいっぱいでした。祖母が目を見ましたと聞き病院に行くと祖母は元気でしたが、前のようにしゃべっていませんでした。簡単に説明すると、「あれ」や「それ」などとにかく思いついたものを口に出しているような感じでした。ですが、それも時がたつにつれ上達していき、今は、言いたいことがだいぶ分かるようになってきました。

私は祖母が言語障害になる前まで、全くといっていいぐらいに障害者との交流がなく、最初はどうしたらいいのか全く分かりませんでした。でも、だんだんと関わっていくうちに、祖母のような人に教えたり、一緒におしゃべりしたりすることが楽しく、かけがえのない時間となっていました。これからも、このような心を忘れずに祖母との時間を過ごしていきたいです。

郡山市立郡山第七中学校 一年 今泉 柚乃

「身のまわりのバリアフリー」

郡山市立富田中学校 二年 國分 綾

私は、六月末に隣の市に学習旅行に行きました。そのとき、初めて違う地域のバスに乗りました。バスに乗って、そのバスの内装の色合いが、自分の住んでいる地域のバスの内装の色合いとあまり変わらないということに気づきました。地域や会社によって内装はけっこう変わると思っていたので、少し驚きました。気になり、インターネットでバスの内装の色合いが似ている理由を調べてみると、「どのバス会社でも、車内はグレーの床、青系のシート、オレンジ色の手すり」と、似たような色使いになっている。これは、バリアフリーの観点から、手すりや段差を目立たせるといふ目的があり、座席も床とのコントラストがはっきりできるようにしている。」と書いてありました。日常でなんとなく見ていた色合いに、しっかり意味があったのだと知り、驚きました。

考えてみると、私の家の近くの駅にも、様々なバリアフリーの工夫がなされているなと思いました。

私は、電車に減多に乗らないため、なかなか駅に行くことがないのですが、先日、駅のホームで見覚えのない点字ブロックを見つけました。その点字ブロックは、よく見る一つのブロックにいくつかの点状の突起があるブロックといくつ

かの線状の突起があるブロック、この二つを組み合わせたような形をしていました。調べると、「内方線付き点字ブロック」と呼ばれる、駅のホームの特別なブロックでした。従来の点字ブロックに加え、線が一本ホームの内側に加えられたもので、どちら側に電車がくるか分かるようになっていきます。目の不自由な人がホームから転落するのを防ぐために作られたそうです。

この駅にはこれだけではなく、まだいくつかバリアフリーの工夫がなされているところがありました。

エレベーターでは、車椅子の人がエレベーター内で回転せずにそのまま進行方向に出られるよう、入口と出口が別々についている、「スルー型」のエレベーターが使われています。車椅子の人が座った状態でもボタンに手が届くようにカウンターの高さが低くされていたり、ボタンやお金の投入口が低い位置に配置されている自動販売機などありました。また、自動販売機には、点字や音声による案内もありました。他にも車椅子の人でも楽に移動できるように、駅の待合室の扉が横開きのものになっていました。

駅のような人通りが多く、いろいろな人が利用する施設には、利用する人が快適に利用できるように工夫がされているのだなと感じました。

あるスーパールの駐車場の入り口には、階段があるのですが、その横に車椅子の人も通ることができる緩やかな傾斜があります。また、そのスーパールの近くの車通りの多い横断歩道では、「ピヨピヨ」や「カッコウ」となる音響式信号機もあります。この「ピヨピヨ」や「カッコウ」といった音をよく耳をすませて聞いてみると、違う方向から流れてきていることが分かりました。青信号になっていることを知らせるだけではなく、どこの横断歩道がどのくらいの時間青信号になっているのかも分かるように工夫されていました。

家の近くの駅やスーパー付近で、少し注意を向けただけでも、数多くのバリアフリーの工夫がみられました。自分が気づいていなかっただけで、いたるところにバリアフリーの工夫がなされているということに気づくことができました。これから社会全体でバリアフリー化がさらにすすみ、障害の有無関係なしに、だれもが快適に住める町になってほしいです。



福島県公立学校 退職校長会 郡山支部 川前 範子

この度、令和三年度「郡山市おもいやり作文コンクール」に応募された児童、生徒の皆さんの作品は、テーマにしっかり向き合い、まとめられたことがよく伝わってくるものであったことを、はじめに述べたいと思います。特に、「障がい者はかわいそうという目で見られることを望んでいない」という文面からは、彼らの気持ちを理解しようとする思いが感じられました。また、障がいをもちながら、「自分ができることについての取り組み」や「努力していること」に関する言及は、障がい者への捉え方の幅を広げてくれるものでした。

さて、私たちが自分の考えを人に伝えようとするとき、最も大切なことはわかりやすさではないかと思えます。今回の作品の中に、家族や友人が障がいをもっており、その生活の様子が書かれているものがいくつもありました。障がいがある人の苦労や彼らとともに願っていることが述べられ、体験に伴う実感が込められていました。体験は、「考え方の根拠」を読む人に示すため、わかりやすさをもたらします。一方、体験がない場合も、人の話や本、パラリンピックの選手の姿など、マスメディアを含む取材を通した述べ方もわかりやすく、このような作品も数多くありました。

二つ目に大切なことは、文中に提言があることです。読む人に気づきを促し、提言する人の問題意識を届ける効果があります。たとえば、視覚に障がいがある方のために「点字ブロックに物を置かない」という提言は、障がい者に対する心遣いを新たにすると効果的であると思いました。

三つ目は、全体をまとめる文があるとよいということです。たとえば、思いやりの大切さについて自分の考えを述べ説明した後、結びにそのことに関し、身近な人などが言っていたことを取り上げ、まとめる方法です。まとめがあると、述べたことの説得力につながります。

以上のおもに三点について検討しながら作文の審査をしましたが、賞を決めなければならず、実際のところ迷う場面がありました。いずれの作品にも地域社会を照らす若い力が感じられ、元気を分けていただいたことにお礼を申し上げます。これからも皆さんが今回のような企画に参加されることを期待しています。

令和三年度「郡山市おもいやり作文コンクール」実施要項

- 一 目的
障がいに対する関心を高め、障がい者福祉を考える機会として、市内の小・中学校の児童・生徒を対象に障がいに関する作文を公募し、優秀作品集を公表することにより、障がい者に対する理解を深めるとともに、児童・生徒の障がい者に対する意識の高揚を図る。
- 二 主催
郡山市
- 三 共催
郡山市教育委員会
- 四 募集対象及び部門
市内在住又は市内の学校に在学する小学生四年生から六年生まで及び中学生
(1) 小学生の部
(2) 中学生の部
- 五 募集作品
(1) 内容
障がいのある人と自分との関わりの中で感じたことや、障がいのある人にとつての暮らしやすいまちや福祉について考えていること等を表現した作文とするが、主題については、応募者の任意とする。
(2) 様式等
一人一点・四〇〇字詰め原稿用紙（B4判）縦書き四枚以内
- 六 応募方法
応募者は、応募票（様式1）と作文を各小・中学校に提出する。小・中学校は、応募者名簿（様式2）を作成の上、作文、応募票及び応募者名簿を提出する。
- 七 応募期限
各学校から障がい福祉課への提出期限 令和三年九月十五日（水）

八 応募先

郡山市 保健福祉部 障がい福祉課
〒九六三―八六〇― 郡山市朝日一丁目二十三番七号
TEL 九二四―二三八一

九 賞

最優秀賞二名（小学生・中学生 各一名）、優秀賞六名程度、佳作十名程度

十 審査

(1) 審査会

審査会の審査員は、四名とし、以下の者で構成する。

ア 郡山市 障がい福祉課長

イ 郡山市 学校教育推進課長より推薦された指導主事等 二名

ウ 福祉関係者 一名

なお、審査会会長は、障がい福祉課長とする。

(2) 審査基準

優秀作品の選考に当たっては、次の基準により行うものとする。

ア 障がい福祉に対する理解を深める趣旨に合致していること。

イ 誰でも分かりやすいこと。

ウ 豊かな表現力であること。

エ テーマによって必要とする基準については、審査員の協議により設けることができるものとする。

十一 その他

(1) 入賞者には、賞状及び記念品を授与する。

(2) 応募者には、参加賞を授与する。

(3) 児童・生徒から小・中学校への提出期限は、各学校が定める。

作文応募状況

【小学生の部】

4年	5年	6年	計
53	47	53	153

【中学生の部】

1年	2年	3年	計
40	34	32	106

応募総数

259

令和3年度
郡山市おもいやり作文コンクール
優秀作品集

令和3年12月

■編集／郡山市保健福祉部障がい福祉課

〒963-8601

郡山市朝日一丁目23番7号

電話：024-924-2381

FAX：024-933-2290

<http://www.city.koriyama.fukushima.jp>